

廣福寺だより

14号

発行所 廣福寺

〒959-1003

新潟県西蒲原郡弥彦村大字麓6590

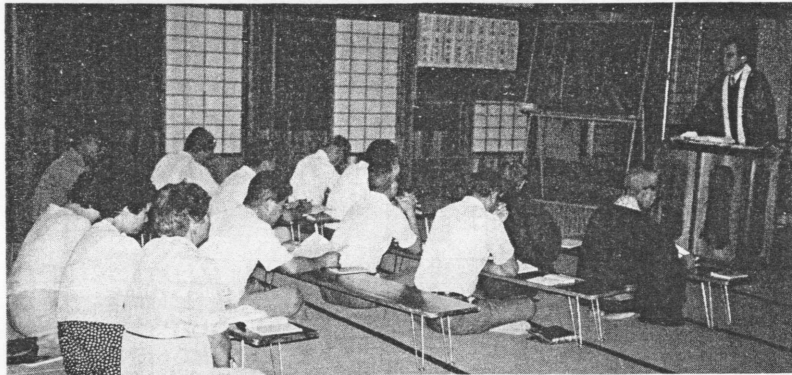
電話0256(94)2437

印刷 ワノウ印刷

聞法の輪をひろげるために

お経の練習とご和讃の講話

廣福寺聞法会 イベントの計画も



本年七月第百四十回例会で花井性寛師の歎異抄講話(写真上、下は懇親会)が終講となり九月の例会でこれからの会の運営について協議、十月から声明(お経)の練習とご和讃の講話が始まっています。声明は行譜正信偈六首引を目標に、目下舌々正信偈を練習しています。ご和讃はふだんのおつとめで一番門徒の方に親しまれている浄土和讃の「弥陀成仏のこのかたは……」から講話を進めています。講話のあととくつろいだ情報交換のひとときを過ごします。新しい会員も増えてきていますが、更に聞法の輪を拡げるために年に一、二回仏教、文化講演会、演芸会などのイベントも計画していきたいとはりきっております。

昭和五十年六月から始まった聞法会も十四年目に入りました。第百回までは広沢憲隆師の正信偈講話が続けられました。戦前には声明会の組織があり麓や辰地区の方々が会員となり今にその伝統を残しています。例会は一月と八月を除く年十回開き毎月二十日の会合を原則としています。

友との出会い、ふれ合いは自分との出会いにつながります。本当の自分が見えたときが仏との出遇いです。聞法会へどうぞ！



地獄一定と気づかせて くださったのがお念仏

△大谷万寿師 秋季差向御布教の中から▽



命終わるまで我執煩惱から一步も出ること
のできない私たちは、本願の光りにあうこと
によって我執が和らぎ
ます。ご和讃に「超世
の悲願ききしより、わ
れらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかわらね
ど、こころは浄土にあ
そぶなり」とうたわれまし
た。他力念仏のみ
教えは聴聞を通してみ仏
の大悲にめざめ浅まし
い凡夫という自覚の上に
汲めども尽きぬ大悲の
本願を仰いでゆくの
です。

自己を問題として聴聞させて頂くとお添書

に示されました。ひとにいえない、辛い、悲しい女の業に泣き、もだえ苦しんだお恥づかしい身の上話になりますが、五人の子供の継母になり子らのためによかれとした結果は行き詰まり地獄のどん底で号泣しました。そのどん底で如来は南無阿弥陀仏という声のみ仏となり給いギリギリのところまで私の正体をはつきりと見せて下さったのです。継母いじめと思っただけは責任転嫁でなかったか。子らのためとしたことがわがはからいの押しつけで

なかったか。我執にとりつかれた私こそまさに極重悪人であったとうなずかされました。称名念仏は助かる手だてを失ったものへの喚びかけに目覚めたよろこび、絶体絶命の心にはじめて響いて下さるのです。

私の寺の聞法会に同朋大学の池田勇諦先生が満堂の聴衆を前にして次のようなクイズを出されました。三人の方が答えを出されAは「明るく」、Bは「平和に」、Cは「楽しく」と書きました。先生は三人の方の答えを消し

クイズ

わたしひとりがぎせいになり
がまんすると

家の中は なる。

どんなことばが正解でしょうか？

て「暗く」と書かれました。私は「その通りでございます」と深くうなずきました。二度も中絶を余儀なくされた時、家族はだれもが言葉が少なくなってしまう、家の中は本当に暗くなりました。本当のぎせいというのはそうせずにおれぬという行為、私の場合、腹の中は煮えくりかえっていました。人間の心の中は煮えくりかえってカッコよく、きれいだはすまされないものですね。私、大谷万寿のものさしではかっていた。その我執の鬼、地

獄一定のわが身と気づかせて下さったのがお念仏でありました。世の中に賢くなる知識を教える学校は沢山ありますが、わが身の凡夫の愚かさを教えて下さるのは仏法だけです。

お念仏を喜んだ母に育てられた娘さんの手記を最後に紹介させて頂きます。

私の一家は貧しいながらもお念仏のよろこびに満たされていました。私が六歳のお正忌さまにお寺さまへお参りいたしました。「み仏は親様だよ。いつでも、どこでも、だれでも抱いていて下さる親様だよ」というお説教を聞きながら母の膝の上でアメ玉をしゃぶっていました。おやすみのひととき母は私の頭を抱くようにして「よう聞きや、お前を抱いているこの母は三十年か、永くて五十年の仮の親だが、あそこにお立ちの阿弥陀さまはお前のいのちの親さまで、昔も昔、大昔からお前を抱いていて下さるのだよ。ほかにはなんにもいらないのだよ。南無阿弥陀仏とおとなえて、いまから一緒に親さまのお国まで参らして頂ける幸せ者だよ。母さんと一緒に南無阿弥陀仏とよろこびましょうね」と。むづかしいことはよくわからなかった母だったと思いますが、ただ一心にお念仏申す人でしたし「おかげさまでですね」と口ぐせのよういう人でした。私はこの時の母の言葉をいまだに忘れておりません。

親から子どもへのお念仏のお相続ですね。

御寄進

本年度次のような御寄進を頂きました。寺の護持に寄せられました御懇念まことにありがたく厚く御礼を申し上げます。

▽定紋入り会津塗りおとき用漆器一式

壺百五拾人前(写真上)

▽定紋入り本堂向拝幕 庫裡玄関幕一式(写真中・下)

▽墓地参道敷石(次頁写真上・中)

▽庫裡建仁寺垣 山茶花生垣建造 庭木柘植

満天星植栽一式(次頁写真下)

以上 燕市 大谷 統司殿

▽本堂焼香卓前座布団一枚

観音寺 河上 マス殿
▽境内庭石(八海石二個)

長岡市 広沢 昭治殿

おとき用漆器は昔ながらの本物のおときの味を頂けると喜ばれております。当寺の正式

の定紋(丸に橘)入りの幕は行事のたびに使用させて頂いております。墓地参道は碎石で歩きにくいといわれていましたが、井戸小屋付近から庫裡わきを通って墓地に至る延々百mほどの参道にミカゲ石を敷きつめて頂きました。須達多長者の祇園精舎建立の故事が想い起こされ(次頁参照)本当に感慨深いものがあります。ありがとうございます。

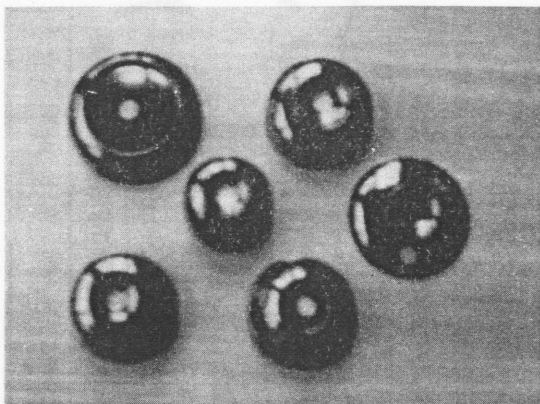
大みそか除夜の鐘つき 午後十一時半ころ

からつきはじめます。皆さんのおいでをお待ちいたしております。

前住職七回忌自坊法要 明年五月十四日の

日曜日に勤めます。このたよりの次号で詳しく御案内を申し上げる予定です。

真宗仏光寺派婦人大会 本山からお裏方様の御出向を頂き、明年六月十八日の日曜日に弥彦の文化会館大ホールで開催されることになりました。地元でもあり多数の方々の御参加をお願い申し上げます。十四歳のとき読まれた歎異抄の御縁でフランスのパリからはるばる海を渡って親鸞さまを慕う一本道の旅、唯ひとすじの人生を歩まれた藤田ジャクリン先生の記念講演が予定されています。



須達多長者と祇園精舎の話

阿弥陀経のはじめに「ひととき、仏、舎衛国の祇樹給孤独園にましまして」とありますが、この祇園精舎は釈尊がその生涯の多くを過ごされた伝道の拠点で、この精舎（寺）建立にまつわる感銘深い物語があります。

須達多という長者（商業資本家）は親のない子や老いて子のない人を助けたので孤独の人に給する者、給孤独と呼ばれていました。あるとき釈尊のうわさを聞き竹林精舎にたずねて教えを受けました。「钱财は常宝にあらず、よろしく速やかに施をなすべし」と。そ

の時舎衛城にもおいで下さるようお願いし早速閑静清浄の地に精舎建立を決心し適地をさがし祇陀太子所有の園林が目にとまりました。譲り受けの交渉は難航、太子はこれを拒むために黄金を園林一杯に敷きつめればその値で売ろうと。あきらめると思ったのに長者は車で黄金を運び地面に本当に敷きはじめたのです。一車では足りなくて、更に車で運ばせます。それをみた太子は大いに驚き、仏法僧のために大財を投じようとする長者の熱意にうたれ「もうやめて下さい。残りの土地はどうか私に寄進させて下さい」と。

こうして長者はこの土地に祇樹給孤独園すなわち祇園（略称）の精舎を建立し太子もまた残りの土地に門屋を建てました。釈尊は大勢の比丘たちを連れてこの精舎に迎えられ、多くの説法がなされました。舎衛城（いまのコシダ州のサーヘット・マーヘット）に仏縁が結ばれて長者一家はもとより太子はじめ王家さらに出家在家の多くの信者が永くその恩沢を受けることとなりました。真宗門徒になじみの深い三部経の一つ、阿弥陀経はこの精舎で説かれた經典の一つなのです。長者が商用で王舎城に赴きうわさを耳にし夜明けを待ちきれずに初めて釈尊にお会い申したのが王舎城郊外の寒林（墓地）でありました。

